『空想から科学へ』読書会レジュメ（第１章）

2009.12.4
文責／須藤

１．本書の位置づけ

本書は、エンゲルスがマルクスの協力を得て執筆した『オイゲン・デューリング氏の科学の変革』(『反デューリング論』)から、3 つの章を抜き出してパンフレットにしたものである(『反デューリング論』の詳しい成立過程は、1892 年の英語版の序文を参照)。

本書は、第 1 章(空想的社会主義)、第 2 章(弁証法的唯物論)、第 3 章(資本主義の発展)の 3 つの章から構成されている。また、いくつかの序文が付されているが、このうち 1892 年の英語版の序文はやや長めのものである。新日本出版社版の「解説」によれば、「とくに哲学上の問題として、不可知論についての叙述は重要です。不可知論については、『フォイエルバッハ論』とこの序文以外にまとまった形としてのべられているマルクス、エンゲルスの著作はありません」とある。

なお、参考として、レーニンの著作『マルクス主義の三つの源泉と三つの構成部分』によれば、「それ〔＝マルクスの学説〕は、人類が十九世紀にドイツ哲学、イギリス経済学、フランス社会主義という形でつくりだした最良のものの正統な継承者である」(引用文は大月書店版・レーニン全集より)と述べられている。すなわち、ヘーゲルなどドイツ哲学からは弁証法的唯物論(第 2 章参照)を、イギリス経済学からは剰余価値学説(第 2 章の終わりほうを参照)を含むいわゆる「マルクス経済学」を、フランス社会主義(空想的社会主義)からは科学的社会主義の理論を、それまでの理論を継承しながら、マルクスとエンゲルスは確立した。本書は、これらの要点を簡潔にまとめた著作であると言える。

２．第１章の概要

(引用文は、国民文庫版(大月書店)によります。また、〔　〕内の補足は、引用者によるものです。)

●現代の社会主義をどのような見地からとらえるか

【第 1 段落】(この部分のまとめは、国民文庫版の解説を参考にしました)

○現代の社会主義をとらえる基本的見地

(1)現代の社会主義は、今日の社会(資本主義社会)における「資本家と労働者との階級対立」および「生産の無政府性」という社会的現実を認識し、この社会的現実が提起するさまざまの社会問題に答えて、これをどう解決するかという見地

(2)それは前の時代のどのような思想上の遺産をうけつぎ、どのような思想上の準備をもって前述の社会的現実をとらえているかという見地

の 2 つの見地から、社会主義の思想(理論)はとらえなければならない。

●啓蒙思想を理論的基礎とした、フランス革命(ブルジョア革命)の成立

【第 2 段落～第 3 段落】

○　この時代は、「世界の上に思想をではなく、思想の上に世界をおいた」時代(ヘーゲル)であった。

→「世界を逆立ちさせた時代」

○ 「迷信、不正、特権、圧制は、永遠の真理、永遠の正義、自然にもとづく平等、人手に渡すことのできない人権によって、とって代わられるべきだ、とされた」

○ しかし、封建制社会に代わって実際にもたらされたのは、「ブルジョアジー〔資本家階級〕の国の理想化」でしかなかった。

→「最も本質的な人権の一つとして宣言されたもの――それはブルジョア的所有権であった」

※〔参考〕

▽フランス人権宣言・第 17 条

所有は、神聖かつ不可侵の権利であり、何人も、適法に確認された公の必要が明白にそれを要求する場合で、かつ、正当かつ事前の補償のもとでなければ、それを奪われない。

▽日本国憲法・第 29 条

①財産権は、これを侵してはならない。

②財産権の内容は、公共の福祉に適合するやうに、法律でこれを定める。

③私有財産は、正当な補償の下に、これを公共のために用ひることができる。

●ブルジョア社会の矛盾のなかから、空想的社会主義が誕生

【第 4 段落～第 9 段落】

○ 「いよいよフランス革命がこの理性社会と理性国家を実現してみると、この新しい諸制度は…けっして絶対的に理性的なものではない、ということがわかった。」

○ 「商業はますます詐欺になった。『友愛』という革命のスローガンは、競争場裡での奸計や嫉妬となって実現された。力ずくの圧迫のかわりに買収などの不正行為が現われ、剣のかわりに貨幣が、社会的権力の第一のてことして現われた。」

○ こうした現実に直面して、「啓蒙思想家と同様に、彼ら〔＝空想的社会主義者〕は、まずある特定の階級を解放しようとは思わないで、いきなり全人類を解放しようと思った。啓蒙思想家たちと同様に、彼らは、理性と永遠の正義との国を実現したいと願った。」

○ しかし、この段階では、資本主義的生産様式が非常に未発達で、したがってブルジョアジー〔資本家階級〕とプロレタリアート〔労働者階級〕との対立も非常に未発達という歴史的な状態には、「未熟な理論が対応していた。…〔空想的社会主義者による〕これらの新しい社会体系は、ユートピアになるという運命をはじめから宣告されてた。」

●空想的社会主義者たちの思想の内容

【第 10 段落～第 22 段落】

○サン・シモン

科学と産業が、社会を指導し支配すべきである。

→ただし、彼の言う科学とは学者、産業とは活動的なブルジョア（資本家や銀行家）のことであった。

→彼の思想には、萌芽的ではあるが、後代の社会主義者の思想がほとんどすべて含まれていた。

（経済状態が政治的諸制度の土台であるという認識、「国家の廃止」など）

○フーリエ

「彼はブルジョア社会の物質的・精神的みじめさを容赦なくあばきだしている。」

「彼はこれまでの歴史の全行程を、野蛮、家父長制、未開、文明という四つの発展段階に分けている。」

→唯物史観にもとづく歴史認識(『歴史における個人の役割』(プレハーノフ)と同様の歴史観)

さらに、いくつかの注目すべき指摘として、以下のものがある。

「ある社会における女性解放の程度は全般的解放の自然的尺度である。」

「文明時代には貧困は過剰そのものから生ずる」

○ロバート・オーウェン

「人間の性格は一方では生まれながらの体質の産物であるが、他方ではその生涯をつうじての、とりわけ発育期におけるその人の環境の産物である、という唯物論的啓蒙思想家の学説を身につけていた。」

マンチェスターの工場やニュー・ラナークの大紡績工場の管理、幼稚園の発案など、「実務的なやり方」による共産主義の実践

→しかし、私有財産、宗教、現在の婚姻形態など、資本主義社会の基礎となる制度を批判し始めるやいなや、彼は公的社会から追放された。

●空想的社会主義の誤りと、科学的社会主義

【第 23 段落】

○ 空想的社会主義者の発想

「彼らのすべてにとって社会主義とは、絶対的真理、理性、正義の表現なのであって、ひとたび発見されさえすれば、それ自身の力で世界を征服することのできるものなのである。」

○ 科学的社会主義の考え

「社会主義を科学にするためには、まずそれを実在的な基礎の上にすえなければならなかったのである。」

以 上